



(原寸)

阿弥陀浄土院の飾り金具

平城宮東院庭園の東隣り、法華寺阿弥陀浄土院跡から出土した建物の飾り金具です。上は、屋根を支える垂木たるきの先端木口を飾った金具。厚さ1ミリにも満たない銅の薄板を鑿で透彫りにして、対葉花文たいようかもんと呼ばれる唐草文の一種が繊細に表現されています。他の二つは、扉や長押なげしの装飾に用いられた金具で、釘の先端が材の裏に突き抜けたとき、あるいは釘の頭を覆い隠すためのものです。裏側には材に打ち付けるための3本の脚がつけられています。扉の材料を記した木簡から、奈良時代には「尻塞しりふたぎ」と呼ばれていたことがわかります。

これらにはいずれも金のメッキがわずかに残っていて、金色に輝く堂宇どううの様子をうかがい知ることができるのです。

(平城宮跡発掘調査部 次山 淳)



調査地より 復原工事中の東院庭園隅楼をのぞむ